追　悼　　梅田博之先生

Obituary　HIROYUKI UMEDA

梅田博之先生の思い出

田窪行則

梅田博之先生がなくなられた。先生は，日本言語学会会長，日本音声学会会長を務められ，長年，言語学，音声学，韓国語・朝鮮語研究，韓国語・朝鮮語教育（以下朝鮮語で統一）に関して多大な貢献をしてこられた。先生はこのような研究面だけでなく，韓国との友好に非常に力を注いでこられた。ある時期の韓国からの留学生で梅田先生に世話にならなかった人はいないという話もよく聞いた。また，韓国では日本語教育にも力を注がれ，日本では朝鮮語教育の普及に心血を注ぎ，名称の問題で前に進まなかった時も，何年もあきらめず NHK でアンニョンハシムニカ・ハングル講座という名称で実現にこぎつけ，その最初の講師を務められた。今の朝鮮語教育の隆盛は梅田先生に負うところが大であろう。

先生は朝鮮語の実験音声学，音韻論，文字，文献学，文法研究，語彙，社会言語学にいたるすべての分野で偉大な業績を残されたが，先生の言語学におけるもっとも偉大な貢献の一つは後進の指導である。しかも実際に教えを受けた人たちだけでなく，私のようなそれ以外のものに対して温かい指導をされた。

梅田先生と最初にお会いしたのは 1975 年に京都産業大学で行われた言語学会であったと記憶している。当時, 修士課程の学生だった私は梅田先生の編集された『現代朝鮮語基礎語彙集』を手に入れたくて，先生とすれ違った時にダメもとでお願いしたら驚くほどあっさりと OK された。もう忘れてしまったが，私はどうも先生の考えられた朝鮮語の音素体系が気に入らず，いろいろと不満を述べたような気がする。先生は笑いながらそれに一つずつ反論を加えられ，まだいろいろ教えてくださいとおっしゃって，別れた。語彙集はすぐに送られてきて，毎日舐めるようにして読んだ記憶がある。なぜか先生は私のことが気に入ったらしく，機会をとらえては，朝鮮語の理論言語学的研究を進めてくださいと励ましてくださった。同様のエピソードは複数の研究者から聞いた。つねに偉ぶらず，若い研究者たちと接することを楽しんでおられて，我々も遠慮せずに先生との議論を楽しんだ。

その後私は 1980 年博士課程を終えるとすぐに国際交流基金の派遣で韓国の慶州にあった東国大学校慶州分校（現慶州キャンパス）に招聘専任講師として赴任し，日本語を教えた。同時に近くの大邱にある啓明大学校で音声学と日本語作文を非常勤で教えるのだが，実はそこは一時期梅田先生が日本語や音声学を教えた大学で，

おりにふれて梅田先生の話題が出た。啓明大を含めて韓国の多くの日本語研究者や日本に留学した研究者がいかに梅田先生の世話になってきたか，先生がいかに韓国の研究者に愛されていたかがよく分かった。

1982 年に日本に帰ってからもお会いするたびに朝鮮語の理論研究をするように勧められたが，帰国して朝鮮語とは距離を置くようになってしまい，いつも申し訳ない気持ちだった。ところが 2000 年に韓国で編集された梅田先生の古希記念の論集に論文を寄稿して，その出版記念式典がソウルで開かれることになり，20 年ぶりに韓国を訪れた。記念のパーティーでは，会場いっぱいの韓国人参加者がいかに梅田先生に日本で世話になったかという感謝の言葉を次々と述べていた。それが語学関係者だけではなく，歴史，政治学，文学ほとんどの文系分野をカバーするのである。先生の韓国，韓国人に対する愛情を強く感じた会になっており，感動を覚えた。この会で梅田先生にふたたび朝鮮語の理論研究をしろと背を押されたのをきっかけに，すっかり忘れていた朝鮮語をもう一度思い出す努力をはじめた。いまだに先生の期待に沿えるような研究はできていないが，それでも朝鮮語の運用能力を取り戻し，いくつか言語学会の夏期講座で日朝対照研究の講義を行い，京都大学ではドラマを通じてみる日韓文化比較の講義を出し，韓国語会話クラブと称して韓国語で言語学の発表会を行う会を主催した。この会はすでに 20 年近く続いている。その間，梅田先生が学長を務めていらした麗澤大学に招いていただき，なんどか集中講義を行い，その際には先生に麗澤大学を親しく案内していただいた。その時にもまた理論言語学による朝鮮語の研究の進捗状況を聞かれ，自分の不明を恥じるばかりであった。

その後，私は韓国の若手の理論言語学者たちとの付き合いを通じて，すこしずつ自分の研究を梅田先生の期待に沿えるように進めて，なんとか最近になっていくつか日朝対照に関する理論的研究を発表できた。あとすこしでこれらを論文にして先生にご覧に入れて，約束が果たせると思っていた矢先の訃報で，残念でならない。

いま日韓の関係がどんどん悪くなっていくなか，梅田先生の日韓友好に果たした偉大な足跡を思い，梅田先生のなき今を我々皆で埋めていかなければならないと強く思う。ご冥福をお祈り申し上げます。

（日本言語学会会長）

梅田博之先生を哭す

藤本幸夫

日本言語学会元会長梅田博之先生には，令和元年（2019）7 月 1 日早朝 5 時過ぎ，満 88 歳を以って易簀されました。御令室様に據れば，医師の死亡診断書では午前

7 時 17 分，心不全による御殞命の由である。ここに謹んで跪伏弔意を表します。

先生は昭和 6 年（1931）4 月 4 日東京で御誕生，戸山高校を経て，25 年 4 月東京大学文学部に入り，言語学を専攻されました。修士課程を経て，34 年 3 月言語学科博士課程修了，同年 8 月名古屋大学文学部言語学科助手，その後 40 年 2 月東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所助手に移られ, 4 月に講師, 42 年助教授, 48 年教授, 58 年には同研究所所長になられました。平成 6 年(1994)3 月末日御定年, 4 月 1 日より麗澤大学外国語学部教授就任，15 年 4 月 1 日至 19 年 3 月末日まで学長を勤め，御定年になられました。

先生の御専門は朝鮮語学であるが，その範囲は広く，音声・文法・語彙，更には方言･アクセントなど，殆ど全般に亙っています。朝鮮語の大きな特徴の一である，弁別的音素としての濃音（硬音）は他の言語では容易に見られぬものですが，先生は昭和 40 年という早い時期に機器を用いてその物理学的・生理学的特徴を明らかにされました。

また昭和 46 年刊『現代朝鮮語基礎語彙集』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）は，現代ソウル方言を対象とした綿密な共時論的記述で，この方面に先鞭をつけられたものです。42-43 年頃先生の近くに下宿していた筆者は時々その下宿を訪れたが，ソウル生まれのインフォーマントを相手に，和やかな雰囲気の中慎重に聴き取りをされるお姿を目睹している。更に日韓対照言語研究も先生がその先駆者であられ，現在盛んに行われている。

先生は又朝鮮語教育及びその普及に常に陣頭に立たれた。昭和 59 年至平成 3 年に NHK テレビのアンニョンハシムニカ・ハングル講座講師，平成 4 年至 7 年にはハングル能力検定協会会長を勤められた。ハングル講座はその名称を巡って紛糾が続き，開講は大幅に遅れたが，ラジオに先立ってテレビで開設され，期待も伴って視聴者も多く大変な盛況だった。梅田先生はどこへ行ってもハングル語の先生と呼ばれ，面はゆかったとのことである。当時急激に朝鮮語を学ぼうとする人が増えたが，それに応え得る研究者は少なかった。梅田先生は戦後の朝鮮語研究の第一世代であり，その要求に応えようと単著或いは共著で 20 種近い入門書を著し，朝鮮語の普及に大いに貢献された。

これらの学問的業績を以って平成 6 年至 9 年に日本言語学会会長，同 10 年至 13 年には日本音声学会会長，又日本における朝鮮学の中心たる朝鮮学会の幹事・顧問を長く勤められた。更に御所属機関の教育行政のみならず，昭和 47 年至 51 年に日本学術会議連絡委員，同 55 年至平成 7 年には学術審議会専門委員，平成 6 年至 10 年に国立国語研究所評議員などを御勤めになり，日本の学術発展にも御尽力されました。また日韓協力委員会理事･日韓文化交流基金評議員･国際文化フォーラム理事･坂口国際育英奨学財団理事等で, 日韓文化交流や学生支援にも力を尽くされました。

これらの御業績と御貢献が高く評価され，平成 3 年に大韓民国政府より玉冠文化勲章，平成 11 年に同国東崇学術財団より東崇学術賞，また平成 20 年に日本国政府より瑞宝中綬賞が授けられました。

先生は温順寛容，その周囲には常に多くの人々が集まりました。李の下，自ら道を成すと申しますが，先生の許には国籍を問わず，多くの人々が集いました。韓国では年長者からは信頼され，年少者からは慕われる存在であられました。韓国の言語学者や国語学者，学生たちの中には先生の御配慮で日本に招かれた方々が多く，日・韓両国の文化交流に大きく尽くされました。日本に来た方々は，実際に日本人や日本文化に接し，理解を深められたことと思われます。麗澤大学の韓国留学生たちは，先生の誕生日には毎年花束を持って集まりました。実際には学あれば徳なく，徳あれば学なしということが多いようですが，先生はまさに学徳兼備に該当する御方でした。

筆者が初めて先生に辱知を得たのは，昭和 42 年 4 月，既に半世紀以前のソウル大学の，当時韓国語学の第一人者と謳われた心岳李崇寧教授の研究室に於いてでした。大学院生向けの演習で受講生は 5 名足らず，その方々も今は斯界の長老になっておられますが，そこへ日本人 2 名が闖入したことになります。李先生は京城帝国大学時代小倉進平先生に就かれた方で，日本語は日本人以上に御達者でした。また李基文助教授の演習にも我々は列なりました。正月 2 日には李崇寧先生のお宅に新年の御挨拶に伺いました。ソウルの東方，昔は雉撃ちをしたという清涼里にある戦前の日本人官舎を払い下げられたお宅で，宅地は広く，大木が亭々と聳えていました。控えの間には弟子達 3，40 人が御挨拶の順を待って居流れ，料理を口に酒を交わし，喧しかった。今は消え去った旧習の，その盛況ぶりは目に浮かびます。我々外国人は直ちに先生の前に案内され，先生と奥様に新年の慶辞を申し述べ，梅田先生が中心に受け答えされて，1 時間近くも料理を頂戴しながら歓談しました。順待ちの方々には気兼ねなことでした。一度は後に九州大学文学部朝鮮史学科に赴任された長正統先生と奥様も同道されました。先生，長先生御夫妻と筆者は，コスモス咲き乱れる古跡南漢山城を探訪し，帰路長先生下宿ですき焼き鍋を囲んだことなど，楽しい思い出は尽きませんが，その中心となって興を盛り立てられるのは何時も先生でした。

先生と筆者の年齢差は丁度 10 歳，先生の麗澤大学御定年と筆者の富山大学停年は同時で，先生の御推輓を得て後任として赴任，自然豊かな環境裏で良き同僚と学生に恵まれ，教育歴最後の 5 年を過ごし得たのは，偏に先生の御配慮のお蔭である。筆者の如き感謝の思い深き方々は，少なからざるものと思われる。

どうか先生には，先生を慕い申し上げる者共の哀惜の念を快くお享け下さり，安らかにお眠りください。

（富山大学名誉教授／麗澤大学言語研究センター客員教授）

梅田博之先生のご逝去を悼んで

韓　美卿

梅田博之先生が 2019 年 7 月 1 日にお亡くなりになりました。謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

恩師の梅田先生には 50 年間，学問のご指導はいうまでもなく，個人的なことまでご恩を受けてきました。これまで受けたご恩もお返しできず，老後の生き方のご相談も申し上げられないとは寂しい限りです。梅田先生の追悼文の依頼を受けた時，不肖の私が書けるものでないと思いましたが，恐れながらも，先生にお世話になった教え子の代表として書かせていただければと思ってお引き受けいたしました。

梅田先生に初めてお目にかかったのは 1969 年，私が韓国外国語大学日本語科の学部生の頃でした。ソウル大学に研究に来ておられた先生に短い間日本語の授業を受けることができましたが，私はあまり印象に残らない学生だったと思います。私が大学を卒業したあと, 日本国文部省招請奨学生として日本への留学が決まった時, 先生にご相談し，お茶の水女子大学の大学院に留学することにしました。修士課程を終え，早稲田大学の博士課程に進んだ私は，朝鮮資料『捷解新語』の韓日両国語の敬語の使い方についての対照研究をすることになりました。早稲田大学の指導教授は辻村敏樹先生でしたので，日本語の敬語は辻村先生にご指導をいただき，梅田先生には日韓両国語の対照研究の方法を学ぶ最も恵まれた学生でした。博士課程に在学中はインフォーマントとして先生の研究をお手伝いする機会が増えました。私は先生のお手伝いをしながら言語資料の扱い方, 分析など学問的方法を学びました。

梅田先生は韓国のあらゆる分野の方と交流を持っておられました。一つは韓国の国語学，言語学の学者との交流，もう一つは日本語学，日本語教育の関係者との交流でした。先生は言語学者として韓国語を研究しておられましたので，私がお目にかかる前からすでに韓国の国語学者との交流は多かったようです。韓国の言語学の若手研究者を日本の大学に招聘し，日本に学術交流に来る学者の日本側の受け入れ機関を推薦されることが多かったと聞きました。

一方，私もその一人ですが，日本語学・日本文学を勉強するために日本に留学していた学生をあたたかく導いてくださいました。先生はいつも誰かの相談を受けていましたが，一人ひとりの個性や長所をよく見定めて適切なご指導をくださいました。学生のテーマに適した大学の教授に推薦してくださったり，留学生の奨学金申請のための推薦状を書いていらっしゃいました。留学生の身元保証人になることや，賃貸契約の保証人になってくださることも多くありました。先生はご自宅以外に書斎をお持ちですが，その書斎に私を含めて韓国から訪日する学者を泊めてくださることも多かったです。また，そこは韓国人の留学生のセミナールームとしても提供され，留学生が集まり，平家物語の読書会などを開いたりしていました。この

ように先生のご恩を受けた留学生は後に韓国へ帰り，各分野で重責を担っています。

1991年梅田先生の還暦祝賀会がソウルのロッテホテルで開かれました。当日祝賀会に参席された先生方は梅田先生の韓国内での人脈の広さに驚き，先生の韓国学における存在感が際立った瞬間でした。日本の学者なので，日本語学や日本語教育関係の人が多いだろうと思って参加した先生方は，韓国の言語学，国語学の錚々たるメンバーが集まっていることに驚いた様子でした。先生は，これ以後，日韓の学術交流がさらに活発に推進されるようになったとおっしゃいました。

その年のハングルの日に韓日文化交流への寄与とハングルの世界化の功績を讃えられ，韓国政府から玉冠文化勲章を授与されました。文化勲章授与は日韓交流に捧げた先生のご尽力へのささやかな報いではなかったのかと嬉しく思いました。

10年後，先生が古希を迎えられた時は日本側の藤本幸夫先生と韓国側の南豊鉉先生を筆頭に古希記念論文集が発刊されました。祝賀の書，交流記，論文，合わせて日韓で72人の学者が参加しました。祝賀会はソウルのプレスセンターで開かれました。韓国の先生方や日本からいらっしゃった先生方で盛大で和やかなパーティーになりました。先生方の交流記には梅田先生の人格と広範囲に渡る人的交流について感嘆のお言葉が書かれています。金完鎭先生の交流記には梅田先生の恩師の河野六郎先生と服部四郎先生の梅田先生に対するお話があります。河野六郎先生のおっしゃるには，梅田君は解決し難いことを頼んでも絶対断ることがないので，面倒なことをお願いすることになるとのことです。服部四郎先生も言語学会のことで梅田先生が誠実に手伝っておられたことを称賛していらっしゃいます。若き頃からの先生の人格が窺われるところです。

先生のご業績とご活躍ぶりは，朝日新聞に「留学先駆者の歩み」（2010年12月23日）という題で取り上げられたことがあります。先生ご自身も，同紙「遠近」欄に「語学は人と人とのつながり，その意味では幸せでした。玄海灘の深い溝を少しでも埋めたい，という気持ちでやってきました」（1994年4月2日）と述べていらっしゃいます。

晩年，先生は日韓の文化交流を積極的に導いてくださいました。先生は学者でありながら，社会的に日韓交流の重責を担い，文化全般に渡って日本と韓国の架け橋としての役割を果たしていらっしゃいました。韓国ではそれぞれの分野で最高の地位に達した人を「文化の大統領」のように「〇〇大統領」と呼ぶことがありますが，晩年の先生はまさに「日韓文化交流の大統領」と呼ぶにふさわしい方でした。私たち後進のもの一同は，先生のご遺志を受け継ぎ，先生が情熱を傾けて築いてこられた日韓文化交流の場を今後もさらに広げていくことを誓います。

（韓国外国語大学校名誉教授）

略年譜

1931年　4月4日　東京都に生まれる
1954年　3月　東京大学文学部言語学科卒業
1956年　3月　東京大学大学院人文科学研究科言語学専修課程修士課程修了
1959年　3月　東京大学大学院人文科学研究科言語学専修課程博士課程単位取得・満期退学
1959年　8月　名古屋大学文学部助手
1965年　4月　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所講師
1967年　1月　ソウル大学校東亜文化研究所客員研究員（1969年1月まで）
1967年　4月　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
1971年　4月　NHKラジオ国際放送（韓国向け）日本語講座講師（1981年3月まで）
1972年12月　日本学術会議語学文学研究連絡委員会委員（1976年2月まで）
1973年　6月　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
1975年10月　啓明大学校客員教授（1976年4月まで）
1980年　3月　文部省学術審議会専門委員（1995年1月まで）
1982年　3月　ソウル大学校大学院講師・韓国外国語大学校大学院客員教授（1983年3月まで）
1983年　2月　啓明大学校より文学博士の学位を授与される
1983年　4月　東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所長（1989年3月まで）
1984年　4月　NHKテレビ「アンニョンハシムニカ・ハングル講座」講師（1991年3月まで）
1991年　8月　国際韓国語教育学会副会長（1993年8月まで）
1991年10月　玉冠文化勲章受章（大韓民国政府）
1992年10月　ハングル能力検定協会会長（1995年9月まで）
1994年　3月　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所停年退職
1994年　4月　麗澤大学教授
1994年　4月　日本言語学会会長（1997年3月まで）
1994年　4月　東洋文庫研究員（2004年9月まで）
1998年　4月　日本音声学会会長（2001年3月まで）
1999年　9月　東崇学術賞（韓国・東崇学術財団）
2001年　1月　日本学術会議東洋学研究連絡委員会委員（2003年6月まで）
2003年　4月　麗澤大学学長（2007年3月まで）
2004年　4月　金田一京助博士記念会会長（2009年3月まで）
2007年　4月　麗澤大学名誉教授・学校法人廣池学園顧問
2008年　4月　瑞宝中綬章
2019年　7月1日　東京都にて逝去

主要著作目録

【著書】

1967 『朝鮮語の基礎』株式会社テック.

1971 『現代朝鮮語基礎語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

1971 『やさしい日本語（会話編）』日本放送協会.

1973 *KOREAN (Asian and African Grammatical Manual No.11)*. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

1974 『言語研修テキスト　朝鮮語・基本文型 I・II』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

1977 『새로운 일본어（新しい日本語）』（村崎恭子と共著）蛍雪出版社（韓国）.

1983 『韓国語의 音声学的 研究―日本語와의 対照를 中心으로―（韓国語の音声学的研究―日本語との対照を中心に―）』蛍雪出版社（韓国）.

1985 『NHK ハングル入門』日本放送出版協会.

1985 『現代日本語　上・下』（韓美卿と共著）法文社（韓国）.

1989 『スタンダードハングル講座 1　入門・会話』（金東俊と共著）大修館書店.

1989 『スタンダードハングル講座 4　作文』（金東俊と共著）大修館書店.

1990 『スタンダードハングル講座 3　解釈』（康仁善・金東俊と共著）大修館書店.

1991 『スタンダードハングル講座 2　文法・語彙』大修館書店.

【監修】

2004 『韓国語概説』（李翊燮ほか著，前田真彦訳）東京：大修館書店.

2012 『標準韓国語文法辞典』（韓国・国立国語院編，李允希と共同監修）東京：アルク.

【論文】

1957 The Phonemic System of Modern Korean.『言語研究』32.

1960 On the Phonemes of the Cheju Dialect of Korean.『名古屋大学文学部研究論集』22.

1961 「朝鮮語漆谷方言のアクセント」『名古屋大学文学部研究論集』25.

1963 「朝鮮語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『朝鮮学報』27.

1965 「朝鮮語のソナグラム」『名古屋大学文学部研究論集』37.

1965 「朝鮮語の「濃音」の物理的性質」（梅田規子と共著）『言語研究』48.

1966 「朝鮮語の文章中の母音の分析」（金東俊と共著）『朝鮮学報』37・38.

1970 Some Experiments on Korean Vowel Sounds: Using an Acoustic Model of the Vocal Tract（金東俊と共著）『アジア・アフリカ言語文化研究』3（東京外国語大

学アジア・アフリカ言語文化研究所).
1972 「朝鮮語霊山方言のアクセント」『現代言語学』三省堂.
1972 「現代朝鮮語の敬語」『アジア・アフリカ文法研究』1（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所).
1973 「朝鮮語と日本語」『朝鮮学報』69.
1974 「朝鮮語の敬語」『敬語講座　第8巻　世界の敬語』明治書院.
1977 「朝鮮語における敬語」『岩波講座　日本語4　敬語』岩波書店.
1977 「일본어의 이른바 형용동사에 대하여（日本語のいわゆる形容動詞について）」（村崎恭子と共著）『白初洪淳昶博士還暦記念史学論叢』螢雪出版社（韓国).
1980 「韓国語の音節末子音の喉頭調節」（朴恵淑・澤島征行と共著）『音声研究資料』1980・3（日本音響学会).
1980 「朝鮮語を母語とする学習者のための日本語教材作成の問題点」『日本語教育』40.
1980 「韓国人学生에 대한 日本語教育時의 留意点」（韓国人学生に対する日本語教育時の留意点）」『日本学誌』創刊号（啓明大学日本文化研究所).
1981 「朝鮮語」『講座言語　第6巻　世界の言語』大修館書店.
1981 An Electromyographic Study of Laryngeal Adjustments for the Korean Stops（朴恵淑・広瀬肇・吉川博英・澤島征行と共著）『東京大学音声医学研究施設年報』15.
1982 「朝鮮語の指示語」『講座日本語学12　外国語との対照III』明治書院.
1982 「朝鮮語の語彙―意味に関する問題―」『講座日本語学12　外国語との対照III』明治書院.
1982 「朝鮮語の文構造」（村崎恭子と共著）『講座日本語学10　外国語との対照I』明治書院.
1982 「朝鮮語の格表現」（村崎恭子と共著）『講座日本語学10　外国語との対照I』明治書院.
1982 「日本語のテンス・アスペクト」（村崎恭子と共著）『講座日本語学11　外国語との対照II』明治書院.
1982 「朝鮮語のモダリティー」（村崎恭子と共著）『講座日本語学11　外国語との対照II』明治書院.
1982 「韓国語と日本語―対照研究の問題点―」『日本語教育』48.
1984 「일본어의 指示詞의 用法―한국어의 指示詞 와의 対照를 통하여―（日本語の指示詞の用法―韓国語の指示詞の対照を通じて―）」『牧泉兪昌均博士還甲記念論文集』啓明大学出版部（韓国).
1985 「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』55.
1986 「日本語と朝鮮語」『朝鮮語大辞典　上』角川書店.
1989 「朝鮮語」『言語学大辞典　第2巻　世界言語編　中』三省堂.

1989 「親族名称の変化」『野村正良先生受賞記念言語学論文集』.
1989 「韓国語の仮名表記」『講座日本語と日本語教育 9　日本語の文字・表記（下）』明治書院.
1990 「경어에 대한 한일 대조연구（敬語に関する韓日対照研究）」『日本学誌』10（啓明大学日本文化研究所）.
1990 「朝鮮語と日本語の述語構造の枠組み」『日本語教育』72.
1990 「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」（荻野綱男・金東俊・羅聖淑・盧顕松と共著）『朝鮮学報』136.
1991 「日本語と韓国語の第三者に対する敬語用法の比較対照」（荻野綱男・金東俊・羅聖淑・盧顕松と共著）『朝鮮学報』141.
1991 「서울말의 모음 변화에 대하여（ソウル語の母音変化について）」『들메서재극박사회갑기념논문집』啓明大学校出版部.
1991 A Diachronic Vowel-Change in Seoul Dialect. *Korean Language Education* Vol.3（国際韓国語教育学会）.
1993 「ソウル方言の母音―特に前舌母音の開閉の対立について」『日本研究』8（韓国外国語大学日本研究所）.
1994 「韓国語の母音」『言語研究』106.
1995 Age Differentiation of the Vowel Systems in the Seoul Korean: Acoustic Measurements.『アジア・アフリカ言語文化研究』48・49.
1996 「韓国語の平音・激音・濃音について」『日本語教育論文集―小出詞子先生退職記念―』凡人社.
1997 「日本における朝鮮語研究の流れ」『日本語と朝鮮語　上巻』（国立国語研究所）.
1997 「訓民正音의 文字論的 意義（訓民正音の文字論的意義）」『한글 새소식』第297号（ハングル学会）.
1998 「日本語話者에 대한 韓国語 音声教育의 問題点（日本語話者に対する韓国語の音韻教育の問題点）」『韓国学論叢』韓国文化社（韓国）.
1999 「硬音再論」『音声科学』6（韓国音声科学会）.
2000 「『捷解新語』의 使役構文（『捷解新語』の使役構文）」（林昌奎と共著）『21세기 국어학의 과제（21世紀国語学の課題）』月印.
2003 「우삼방주의 한국어교육론（雨森芳洲の韓国語教育論）」『韓国日語日文学研究』46（韓国日語日文学会）.
2008 「北朝鮮の敬語政策」『日本語学』27-7（明治書院）.
2010 「韓国語のキョウダイ名について―再論」『言語と文明』8（麗澤大学大学院言語教育研究科）.
2012 「韓国語の丁寧さを表わす終助詞요についての覚え書」『言語と文明』10.
2013 「廣池千九郎博士の「吏道」研究」『言語と文明』11.